

# 「八分」と「ハブ」

上

ノンフィクション作家 三山 喬

## 選挙違反

「この地区には旧村時代からの地元意識が比較的残っています。市内中心部へのライバル心だったり、住民のつながりが強い面だったり。でもさすがにもう昔の『ムラ社会』的な感覚はないですよ。変なしがらみや閉鎖性があるわけじゃない。うちの親はちょうど団塊の世代になります。純農村だったころの雰囲気は、祖父母世代、九十歳以上の人にしかわからないんじゃないですか」

壮麗な富士山が眼前に迫る静岡県富士宮市。市街地から北方約八キロの集落にあるカフェレストランで待

キュメントの映画になり話題作となった。

近代映画協会と現代ぶろだくしゅんが共同制作した『村八分』（今泉善珠監督）という作品である。

国政選挙で村内にあからさまな選挙違反があり、ひとりの女子高校生が義憤に駆られてその事実を新聞社に告げた。しかしその波紋は新聞報道に留まらず、関係者の検挙にまで発展し、彼女とその一家は多くの村人から恨みを買ひ、村八分になってしまう……。そんな実話をもとにした作品だ。

ちなみにこの映画で女子高校生役を演じたのは、当時まだ十七歳だった中原早苗。本作でのデビュー以後、日活や東映で活躍した女優だが、このシリーズで最初に採り上げた焼け跡派の監督・深作欣二は、奇しくもその結婚相手になる人だった。

選挙違反から一年も経たない時期の撮影は、住民の強い反発を受け、ロケ地は途中から近隣の御殿場市に移さざるを得なかった。それでも屋外シーンに何度となく巨大な富士山が映り込む映像は、上野村とよく似た雰囲気醸し出している。

七十年近くを経て、砂利道が走る田園風景は小ぎれいな住宅地と田畑が混在する景色に入れ代わり、葦葦

ち合わせた田邊元裕は、仕事用の名刺ともう一枚、地域おこし関連のプロジェクトを列挙した名刺を出してくれた。

本業は、企業のホームページなどを作成する会社の経営者。JR身延線富士宮駅近くに事務所を構えるが、生まれ育った「地元」は郊外のここ上野地区になる。昭和三十三年（一九五八）年の市町村合併前は上野村という独立した村だった。

私がこの土地を訪ねたのは、この村の名を全国に知らしめた昭和二十七年（一九五二年）の出来事について調べるためだった。

本連載で前回まで取り上げてきた埼玉の本庄事件と同様に、上野村で起きた騒動も、翌年の春、セミ・ド

きの家並みはもはや見当たらない。いずれにせよ、静岡のだからで温暖なイメージを象徴する富士山麓のパノラマと、「村八分」「ムラ社会」等々の陰鬱な言葉にはかなりギャップがある。

## あらわな憎悪

戦後七年目の上野村で起きた「村八分事件」とは、果たしてどんな出来事だったのか。まずは映画作品の流れを追う形であらましを見てゆこう。

県内全域で参議院の補欠選挙があった昭和二十七年五月六日の翌日、慌ただしく翌日開票の状況を追う静岡市の「朝陽新聞」支局に一通のハガキが舞い込んでくる。

「今日参議院補欠選挙で、私が学校から帰った時、母親が『地区の』組長さんが入場券を集めて回っていた』と言った。事情を聞くと、組長が不在者や老人の入場券を『棄権防止のためだ』と言って回ったということ。こんな正々堂々とした違反が行われてよいものではないか。真相を貴支局でお調べ下さい」。そんな内容がしたためられていた。